クラシック鑑賞記～コンサートホールへ行こう！

―◆―演奏会情報―◆―

2012．10.06（土）　ル・ポン 2012　赤穂国際音楽祭

（会場）　赤穂市文化会館ハーモニーホール

（曲目・奏者）

［1］F・A・ホフマイスター　ホルン五重奏曲
ナタリア・ロメイコ、樫本大進（ヴァイオリン）／アミハイ・グロス（ヴィオラ）／クラウディオ・ボルケス（チェロ）／ブルーノ・シュナイダー（ホルン）

［2］G・イェナー　三重奏曲
コンスタンティン・リフシッツ（ピアノ）／ブルーノ・シュナイダー（ホルン）／ポール・メイエ（クラリネット）

［3］J・ブラームス　ワルツ集 op.39
コンスタンティン・リフシッツ、カティア・スカナヴィ（ピアノ）

［4］J・ブラームス　弦楽六重奏曲第 1 番
樫本大進、川久保賜紀（ヴァイオリン）／アミハイ・グロス、ギャレス・ルベ（ヴィオラ）／クラウディオ・ボルケス（チェロ）／ナビル・シェハタ（コントラバス）

―◆―鑑賞記―◆―

［0］はじめに

この音楽祭「ル・ポン」は、2007（平成 19）年に始められた比較的新しい音楽祭だ。

そもそも、兵庫県赤穂市で開催されるきかっけは、現在、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団のコンサートマスターを務めるヴァイオリニスト・樫本大進氏の御母上の出身地であり、樫本氏がヨーロッパで開かれているような市民手作りの音楽祭を定期的にできないだろうか、という提案を受け、市内の音楽愛好家や音楽教室講師らがその想いを実現させたことによります。

その後、2009（平成 21）年、2011（平成 23）年は赤穂市で、2008（平成 20）年、2010（平成 22）年は姫路市で開催されてきたが、今年は、姫路市と赤穂市の共催という形で、両市の会場で開催されることとなった。

また、この「ル・ポン」とはフランス語で、「架け橋」という意味だそうだ。近隣市町との架け橋、住民との架け橋、広く日本、世界の人たちとの架け橋となる音楽祭として育んでいきたいという思いが込められているらしい。

昨年、姫路市で開催されたこの音楽祭に足を運び、引き続き、今年も訪れた。今年は、赤穂市民会館ハーモニーホールでの第 2 夜の演奏会に出かけた。このホールそのものは初めてだったが、1,000 人強が収容できる広さで、比較的大きく、また新しい。室内楽をやるには、少し広い印象を受けたが、それは演奏を聴いてのお楽しみだ。では、演奏の様子をお伝えしていきたい。

［1］F・A・ホフマイスター　ホルン五重奏曲
ナタリア・ロメイコ、樫本大進（ヴァイオリン）／アミハイ・グロス（ヴィオラ）／クラウディオ・ボルケス（チェロ）／ブルーノ・シュナイダー（ホルン）

ウィーンの作曲家・ホフマイスターによる作品。ホルンの響きが何よりこの曲の重点だ。名手・シュナイダーをしても、やはりウィナーホルンの響きには物足りなさがある。やはり、ウィーンの楽器を使わないとダメなのだろう。
とはいえ、さすが世界で活躍するそうそうたるソリストたちの共演は、他では聴けるはずもなく、今夜のこの瞬間だけのものだ。そう思うと、何とも感慨深い。
2 楽章から成るわずか 10 分ほどの小曲だが、ウィーンからの風を運んでくれた。

［2］G・イェナー　三重奏曲
コンスタンティン・リフシッツ（ピアノ）／ブルーノ・シュナイダー（ホルン）／ポール・メイエ（クラリネット）

ピアノが実に素晴らしい。ポール・メイエのクラリネットも良い。
作曲家・イェナーは、ブラームスが公式に弟子と認めた数少ない一人というだけあり、どことなくブラームス的な響きを持った曲だった。
後半のプログラムを意識した選曲だったのだろうが、的を得ている感じだ。
各楽器が奏でるメロディーが、それぞれに会話しているような部分が、とても面白く、3 人の奏者たちの息もピッタリといったところ。さすがに素晴らしい演奏だった。

［3］J・ブラームス　ワルツ集 op. 39
コンスタンティン・リフシッツ、カティア・スカナヴィ（ピアノ）

今回の音楽祭の中で、一番、印象に残ったのが、このピアノ重奏だ。16 曲からなるワルツ集は、「ワルツ」というくくりで、これだけ表現されるということへの驚きだけでなく、そのメロディアスな楽しみを堪能することができる。
ウィーンっ子（といっても生粋ではないが）のブラームスならではの作品といえよう。
また、リフシッツとスカナヴィの 2 人の名手が、それを事もなげに再現してくれた。1 台のピアノの鍵盤を分け合って弾く、いわゆる 4 手版の作品で、弾く者が互いに協調しながら演奏しなければ、あれだけの名演は生まれない。
改めて、「ブラボー」の声をささげたい。

［4］J・ブラームス　弦楽六重奏曲第１番

樫本大進、川久保賜紀（ヴァイオリン）／アミハイ・グロス、ギャレス・ルベ（ヴィオラ）／クラウディオ・ボルケス（チェロ）／ナビル・シェハタ（コントラバス）

最後は、音楽祭のコーディーネータである樫本氏がトップを務めるだけあり、期待も高まる。

第２楽章、第３楽章と少し中だるみをした感じがあったが、第４楽章の締めくくりは、「さすが！」という感じだった。とくに、第２楽章は聴かせどころ（官能的なメロディー）だっただけに、やや残念。会場の広さというか、雰囲気というか、そういった要素も関係しているのかもしれない。

コントラバスが少し邪魔しているように感じたのは、わたしの知識の無さ。後でゆっくりとパンフレットに目を通すと、普通は、チェロ２本で演奏されるものを、コントラバスで演奏したらしく、至難の業が要求されていたとのことだ。ごもっとも。

［5］おわりに

さすが世界で活躍する奏者たちの共演！

と言いたいところだが、何か物足りない。

室内楽を中心とした音楽祭は、各地で催されており、その先駆けの一つが、長野県木曽郡木曽町で開催されている「木曽音楽祭」だ。

わたしは、かれこれ10年近くこの音楽祭に足を運んでいるが、こちらもまさに手作り。そして、そこに集う音楽家たちも、この音楽祭を楽しみにしているそうだ。１週間余り木曽に集い、音楽祭に向け練習に励んでいるそうだ。

その熱意というようなものが、木曽音楽祭からは感じられる。もちろん、ル・ポンも素晴らしい音楽祭だと思うが、始まって間もないということ、開催が隔年だということ、何よりも演奏する者たちの核となるメンバーが毎回違うということ、こういった要素が、少し物足りなさを感じる原因なのかもしれない。

次の開催はいつで、どのような形か、まだ公表されていないが、今後に期待したい。